

# 阿育王塔に關する研究 (承前)

石 崎 達 二一

## 念救傳來説及寂照の飛鉢傳説其他

今昔物語に於て前記説話の傳來者と稱する念救は寂照と共に入宋した七人の僧(註二)の一人で滯留十餘年の後長和四年(AD1115)五月天台山大慈寺の再建に當りその知識使として寂照の藤原道長に宛てた消息等を齎らして一旦歸朝し、道長・實資等の知識物を得、又入宋僧寂照・元燈・覺因・朗達及自分の五人の度縁を求め更に嘗て天台山から比叡山に送られた贈物に對する通牒を得て同年七月再び京都を發して宋に赴いた僧である(註三)。その後の事蹟は何等記録の徴すべきものがないから不明であるが蘇州の吳門寺に留まるに及んで寂照はその徒の留住を好まないもの數人を本國に還した(註三)から或は念救も其中に交り日本に歸つたかも知れない。

今昔物語の前引の文に依ると念救が「此國に返りて」語り傳へたといふが、それは一旦歸朝した時か又再入宋後歸朝したのか明らかでない。その何れにしても念救が此の物語を傳へた年代は尠くとも一旦歸朝した長和四年以後である事に疑ひないがそれがその時であつたか、或ひはその後であるかは不明である。然し念救が後、歸朝したといふ史料は今少しもないので決し難いが、或は寂照と

共に宋に留まつたとしても歸朝したと假定すれば寂照の寂(長元七年)後あまり年代を距てない頃であつたと考へてよからう。果して然らば念救が傳へた年代は長和四年から長元の末年頃まで約二十五年間の間と見る事が出来、前記今昔の説話を廣清涼傳の著録した年代よりも尠くとも約貳拾年以上前に日本に傳へた事が知られるのである。その傳説を寂照に結び付けたのは念救であるか或は口碑の繼承者であるか或は又今昔の著者であつたかは詳にし得ないにしても尠くとも今昔のこの物語の原型を口傳の念救が傳へたといふのを事實と認める事が可能であるならば寂照や念救が五台山に參つて直接この話を傳へたものに相違ないと攷へられる。依つて寂照の五台山參詣説を肯定して差支ない事になるが參詣の年代は前出道長の消息の如く寛弘五年の前であつたか或は後であつたか詳でない。前記寺記に寛弘二年頃五台山から丹書漆函を海に投じたといふがこれ等は全く當にならない事は既に述べた。猶寂照の事は前出參天台五台山記際寧五年の條に引く揚文公談苑に相當詳しく見ねて居り天台山へ登つた事は記してゐるが五台山參詣の事は記してゐない。しかし參天台五台山記には宋史日本傳に見ゆる齋然の五台山參詣の事をも記してゐない事等から類推して寂照の參詣をも省略したとも考へられるので、この書に記さないからといつて直ちにその參詣を否定する事は出来ぬ。又宋史日本傳にあつては寂照が天台山へ參つた事すら省略してあるから五台山へ參つた事は勿論省略したものと思はれる。

因に入宋後の寂照が宋の宮廷に於いても名聲噴々たるものがあつた證左として今昔物語の前出説話の前の飛鉢の説話をあげる事が出来るがこれは續本朝往生傳大江定基の條下に

「到大宋國、安居之終、列於衆僧末、彼朝高僧、修飛鉢法、受齋食之時、不自行向、次至寂照、寂照心中大耻、深念本朝神明佛法、食頃觀念、爰寂照之鉢、飛繞佛道三匝、受齋食而來、異國之人悉垂感涙云云」

と見わたるのがその出據である。而して寂照の鉢が自ら飛び齋食を受取つたといふ事は五台山の文殊信仰と大に關係があるので西晋錄に附せらるゝ佛説放鉢經(註五)等に依ると文殊と佛鉢の關係が明かであるから寂照と五台山との關係も淺くない事が知られるが由來佛鉢は文殊信仰と結び付いたものゝ如くそれから聯想され發達した飛鉢傳説も頗る多い。飛鉢傳説の極く古い形は法顯傳所載(註六)の如く佛鉢が佛敎の靈蹟となるべき地を選んでその地に留まるといふので、それが發達したものでらしいが、五台山は古くから文殊の聖蹟として崇拜されたのであるから佛鉢の信仰も存した(註七)事は確かでかの慧超の撰に係る千臂千鉢文殊經(註八)等もこの信仰から生じたものと思はれ、燉煌千佛洞第六窟壁畫には千臂千鉢文殊曼荼羅の圖(註九)等がある。我國にも法道仙人又は空鉢上人に關する飛鉢傳説(註一〇)を初めとして信貴山には飛鉢の傳説(註一一)があり鳥羽僧正の描いたといはれる信貴山縁起繪卷に飛鉢の面白い圖が描かれてゐる事(註一二)は周知の事で江州蒲生郡伊崎寺縁起にも飛鉢の傳説(註一三)がある。其他檢索すれば澤山あらうが何れも多少とも文殊と關係を有するのであ

る。

而して寂照には此の他にも文殊信仰に關する傳説がある。即ちその一はこれも五台山に登つての事で天台霞標に文殊靈驗集を引いていふ。(註一四)「昭一日遊五台山、忽覩亡妾於山中、初形如常、俄爾變成文殊師利、金色焜煌、不久滅云」と。五臺山にはよくかゝる靈驗が傳へらるゝが、この説話は特に文殊の滅婬欲法の功德を具體化した傳説と考へらるゝ。即ち阿婆縛抄に(註一五)文殊滅婬欲法の儀軌があるがその中に「若又文殊、有<sub>レ</sub>此功能、得<sub>レ</sub>心他五字等眞言誦、滿可<sub>レ</sub>滅<sub>レ</sub>婬欲<sub>一</sub>歟云」又は「軌云是咒能令<sub>レ</sub>諸失心者、還得<sub>レ</sub>正念、滅<sub>レ</sub>婬欲火、除<sub>レ</sub>我慢法、三毒垢盡自然清淨文」といひ更に「又云若至誦誦者、婬欲火漸消、滅婬欲己、心得<sub>レ</sub>解脫、心解脫已則得<sub>レ</sub>道果、神力功用滅諦不<sub>レ</sub>虛文」等とも記してあるから文殊の眞言には滅婬欲の功德があると信せられた事が分り、その功德を具象化してかゝる説話が傳へられたものと考へらるゝ。又その二は今昔物語・天台霞標等に記さるゝもので(註一六)内容は寂照が入宋前山階寺の僧清範律師から珠數を貰ひそれを持つて清範の寂後入宋したのであつたが、支那の宮廷で、四五才許の子供が出て來てその珠數は嘗て自分の持つてゐたものであるが、まだ失はないでよく持つてゐた等と日本の言葉で話して奥へ入つて行つた。それで清範が寂後支那へ生れ變つた事を知つたが在世中清範は説法が巧みで文殊の化身と稱せられてゐたのと思ひ合はずと確に清範は文殊の化身であつた事が知られたので寂照はその子供の入つて行つた



方を拜んだといふのである。そして今昔物語の著者は「實に此れこそ聞くに貴く悲しき事有れ」と讚嘆し更に「此れは彼の律師と共に震旦に行たる人、返て、語るを、聞き繼て語り傳へたるや」と結んでゐる。この傳説の傳來者も或は念救でなからうかとも思はれるが念救でなければ前記した寂照と共に入宋した僧の誰かであらう。この説話に見ゆる傳説も亦恐らく覺禪鈔等に傳へる文殊は童子で童目を有すといふ口傳(註一七)を具象化したものではなからうか。かく考へてくると寂照の支那に於ける傳説は殆んど文殊信仰から出たものである事が知られるから、寂照自らがいかにも熱心な文殊信仰者だつた事を推測し得る。依つて特別の事情を想像しない限り、在宋三十年に及んだ、かくも熱心な文殊信仰者が、その文殊の聖蹟たる五台山に參詣しないといふ事は又殆んどあり得ない事になるのである。尤も文殊信仰は當時一般の信仰で成尋等の如きも亦熱心な信者の一人であるが(註一八)而して彼は五台山に參詣したのであるが、その成尋には文殊に關した一つの傳説すら傳へられてゐないのに、寂照にのみかくも多くの文殊に關する傳説が結びつき、且つその中前記の三の五台山に於ける傳説を傳へてゐるのは、單にこれのみから言つても、寂照が五台山へ參詣しなかつたといふと反つて不合理に陥る事にならう。依つてこれらの點から考へて先づ寂照は五台山へ參詣したものと推定して誤りがなからう。

(註一) 歴代皇紀長保五年八月二十五日の條に「參川入道寂照俗名僧元燈念救等、離日本、進發西海」とある。猶念救に就いては定基

鷲尾順敬氏の「入宋僧念救」と題する研究がある。(中央史壇第六卷第四號所載)。(註二)法成寺攝政記長和四年七月十五日の條小右記長和四年六月十九日の條及長保四年七月廿一日の條、日本紀略後篇十二長和四年五月七日の條、百鍊鈔長和四年五月七日の條等に依る。(註三)皇朝類苑卷第四十三に依る。參天臺五臺山記前出の條にも引用されてゐる。(註四)今昔物語卷十九前出の條、この話は宇治拾遺物語卷十三「寂昭上人鉢を飛ばす事」の條に單行してゐるが、猶天臺霞標三ノ二圓通寂照上人鉢受齋の條下にも寄歸往生傳を引いて出してゐる。(註五)大正新修大藏經經集部二所收。(註六)法顯傳曰、「佛鉢本在毘舍離今在捷陀衛竟若干百年法顯聞誦時有定歲數但今忘耳當復至西月氏國若干百年當至于闐國住若干百年當至屈茨國若干百年當復至師子國若干百年當復來到漢地若干百年當還中天竺已當上兜率天上彌勒菩薩見而歎曰釋迦文佛鉢至即共詣天華香供養七日七日已還閻浮提海龍王將入龍宮至彌勒將成道時鉢還分爲四復本類那山上彌勒成道已四天王當復應念佛如先佛法賢劫千佛共用一鉢鉢去已佛法漸滅」。(註七)大成佛教藝術史の研究二五〇頁に五臺山大顯通寺に千鉢殿があり千臂千鉢文殊菩薩の尊像が安置されてゐた事が記されてゐる。猶參天臺五臺山記卷八熙寧六年四月十七日の條に「千鉢文殊一見了、註出儀規一卷、爲五臺山修行也、以一本送日本」と見え近江國園城寺藏千鉢經大治四年原寫康平三年轉寫本與書に「奉進上文殊千鉢經一部十卷、右旨趣、成尋阿闍梨、在宋之時、新譯經三百卷奏云云(以下略)」とあるから五臺山の文殊と佛鉢信仰との關係を見る事が出来又後記する成尋の文殊信仰をも窺ふ事が出来る。(註八)高楠順次郎氏慧超傳考(大日本佛教全書遊方傳叢書第一六三頁)に依る。(註九) *Pe-licht, Touen-houang I, Pl. XIII (註一〇)* 空鉢上人は慈信を稱したもので慈信は延喜項の人である。元亨釋書第十四慈信傳に依ると「釋慈信有神異、常飛鉢乞食、故世號空鉢上人」と見える。法道の事は元亨釋書卷第十八法道の條及本朝高僧傳等に見えてゐる。(註一一)今昔物語卷第十一、修行僧明練始めて信貴山を建つる語第三十六、及宇治拾遺物語卷第八信濃聖の事參照。(註一二)飛倉の卷。(註一三)近江蒲生郡志卷七・二三八頁所引緣起に依る。(註一四)同書三ノ二、圓通寂照上人文殊靈感の條。(註一五)同書卷第一(佛教全書本第四冊)。(註一六)今昔物語卷第十七律師清範知文殊化身語第三十八、天臺霞標三ノ二、圓通寂照上人文殊靈感の條。(註一七)覺禪鈔、五字文殊法中に。幢爲文殊、事亮惠上略 師云。文殊云童子、有眼、云童目、一切菩薩皆俗形也、(佛教全書本第三冊)と見えてゐる。(註一八)參天臺五臺山記卷一延久四年三月十六日の條等に船中

に五臺山の文殊を念じ又文殊供を修した事が見え五臺山で種々の靈瑞に會ふた話は同書卷五熙寧五年十一月廿七日の條、同十二月二十六日の條等に見える。

### 石塔寺阿育王塔傳説附會の根據

前記盛衰記等の石塔寺阿育王塔傳説は寂照が五台山へ參詣しなかつたとすると全然荒唐無稽な傳説となつて了ふので、相當力を注いでこの事實を研究して見たのである。然し大體に於て寂照は五台山へ參詣したと推定し得るから、五台山へ參詣した寂照がこの阿育王塔傳説の主人公となつた理由を推考して見やう。それに就て次の様な事が考へらるゝ。即ち五台山東臺にはもと「石堂寺」といふ寺があつた事が廣清涼傳卷上に東臺の古寺一十五の一としてあげてあるから知る事が出来るがこの石堂寺を石塔寺と附會したものはなからうか。

東臺は同書に依ると舊名雪峰山麓有研伽羅山臺上遙見滄瀛諸州日出時下視大渡猶陂澤焉」といひ五臺新志卷二に依ると「別名望海峯五更時日出搏桑可以望見大十倍於車輪江輪之下隱隱有水光閃爍即東海也」といふ如く東海につゞくと信せられたのであるから寂照が丹書漆函を海に投じて日本の朝廷に傳へたといふ傳説の趣向も頗る合理的なわけである。而して石堂寺が果して如何なる傳説を有したかは今詳でないが阿育王瑞現塔が東臺にある事と思ひ合はすと、そこにある石堂寺と江州の石塔寺イシドウジと、そこに何等かの關係が成立した事を看破するに難くはなからう。寂照は在俗時代に三河

守になつた事は前記諸書に明らかであるから三河守としての大江定基は石塔寺の附近の街道等を通り鈴鹿峠を越へ伊勢桑名等を経て三河に往來した事を推知し得る。果して然りとすれば彼はかの古色蒼然たる石塔寺塔を見てゐたものと想像することも出来る。かくて後入宋し五台山へ登つた寂然がそこに阿育王瑞現塔を見、石堂寺を見てこれに奇異の感を抱いたといふ事はあり得る。それが何等かの事縁に依て(恐らく念救等が傳へたものであらう。)日本に傳はりこゝに石塔寺の塔が阿育王塔だとする様な傳説を構成する根據となつたのかも知れない。人或は石塔寺の名は前記寺記等にある如く塔が発見された寛弘二年から以後阿育王山石塔寺と稱したのでその頃はまだ石塔寺と稱さなかつたのではないかといふかも知れない。しかし石塔寺は普通解されてゐる様に(註一)石塔があるから石塔寺と呼んだのではなく鬼室氏の宗族が室徒と稱しそれが轉訛してイシドウと稱する地名が起り次いで寺名に及んだ事は前記した拙稿に既に考證したから今は記さない。依つて古く石塔イシドウと稱する地名が存したのであるから右の想像は相當根據ある説といふ事が出来やう。

而してこれを寂照が丹書漆函として海に投じ日本に通じたといふ傳説は或は參天台五台山記の前記寂照の記事の條下に

「以<sub>ニ</sub>黒金水瓶<sub>一</sub>寄<sub>レ</sub>謂(丁謂の)事(事註二)并詩曰、提攜三五載、日用不<sub>ニ</sub>曾離<sub>一</sub>曉井斟<sub>ニ</sub>殘月<sub>一</sub>、春爐釋<sub>ニ</sub>夜漸<sub>一</sub>、鄒銀難<sub>レ</sub>免<sub>レ</sub>侈、萊石自成<sub>レ</sub>虧、此器還實、寄<sub>レ</sub>君應<sub>レ</sub>可<sub>レ</sub>知(註三)

とある圈點を附した部分を附會して起つたものではあるまいか。これに就いては猶寂照が非常に字が巧みであつた事も(註四)考慮の中へ入れねばならない。而してかくの如く石塔寺の傳説は先づ何かの事情に依り寂照と結び付き日本に傳へられたのであるが、恐らくそれからずつと後に剽縣阿育王塔傳説を附會するに至つたものと考へられる。

「それは剽縣阿育已塔が明州の地にあり日支交通の要路に當つてゐた明州に近かつたから(註後)入宋僧入宋使等の參詣する者多く、爲にその傳説は早く我國に喧傳されたので、それがそのまま我石塔寺阿育王塔に結び付けられたのである。猶その附會の原因に就き次の様な事も考へらるゝ。即ち剽縣の剽は Mao で寫されるから江州蒲生郡(支那流にいふと縣であつて郡ではなう。)の地名蒲生 Gamo の Mo を強く響かせるどそれと同音となる爲にこれを同視するに至つたものではあるまいか。(註五)或は後記する如く育王山の徳兄寂照と我入宋僧寂照とを同視して附會したのかもしれない。

(註一)近河蒲生郡志卷七・二三八頁。(註二)丁謂に就いては前記西岡氏の寂照に就いての研究(史學雜誌第三十四編第十號七一—八頁参照)。(註三)此詩が頗る有名であつた事は皇朝類苑四十三・楊文公談苑(參天臺五臺山記はこれに依つたものである)等に引かれてゐた事でも知られ我國でも元亨釋書卷十六天臺霞標一ノ四其他に引かれてゐる。(註四)宋史日本傳、其他前記皇朝類苑・楊文公談苑等の數書に見える。(註五)前に自分は剽縣阿育王塔傳説が五臺山の阿育王塔傳説から發展したものであるかといふが憶測を加へると剽縣阿育王塔の信仰が盛となり五臺山のそれが忘らるゝに至つたので五臺山ではそれについて何か五臺山の方にも靈瑞多く阿育王塔があつたといつた様な説が行はれてゐたのかも知れない。それが端なくも何かの事

情に依り傳説化して江州蒲生郡阿育王塔と同視されて日本に傳はり江州石塔寺阿育王塔傳説に附會されたとも考へらるゝ。これは憶測であるが、或は又後の支那の事情に通じた僧侶(後記)あたりが、劍縣阿育王塔と蒲生郡阿育王塔と同一視して附會したのかも知れない。かゝる事は詮索の限りではないが、とに角全く荒唐無稽と思はるゝ石塔寺阿育王塔傳説も深く攻へて見ると由來する所相當深く、事實の面影をも含んで居る、又阿育王塔傳説發展の流れに掉さしてゐる事が知られるのである。

### 寂禪及光延に就いて

石塔寺僧として尤も古く前出縁起にも見ゆる寂禪の傳記は後拾遺往生傳卷下元亨釋書石塔寺沙門寂禪傳、本朝高僧傳江州石塔寺沙門寂禪傳其他に見ゆるが寂禪は壽八十三臘五十四餘を以て治曆三年八月二十一日寂したと記すから寛和元年の誕生で三十歳の頃剃髪した事は此等の諸書に見ゆる。而して寂禪が石塔寺に住したのは凡そ永承の中頃(註一)かと思はれるのであるが後拾遺往生傳には「占近江蒲生郡石塔別處永明蟄居是則阿育王八萬四千塔之其一也」と見るので石塔寺の別處にゐた事が分る。所で元亨釋書以下では恰も石塔寺に住した如く記すのはこの事實が轉化したものと思はれるが本朝高僧傳には著者師蠻の阿育王塔實見記が見えてゐる(註二)。猶後拾遺往生傳は三善爲康(保延五年九十  
一歳を以て没)の撰に係るからその晩年の作と見ても崇徳天皇の時代(AD1123-1140)に成つた事が知られその中に既に前出の「八萬四千塔之其一也」の如き文字があるのであるから尠くとも石塔寺阿育王塔がその頃には既に阿育王塔として信仰されてゐた事は明らかである。更に兵範記の嘉應二年三月七日戊午の條に「詣蒲生西郡石塔」とあるがこれは明らかに阿育王塔に參つたので

あつて當時既に阿育王塔傳説が相當一般に有名になつてゐた事が知られる。とに角寂禪の住した頃（永承の中頃から後三年寂するまで）から阿育王塔として有名になつたらしいので彼が叡山の僧であつた事（初め座主慶圓、後慶祚に學んだ）（註三）、及彼の法名の寂の字が前記寂照の寂と同じである事等と思ひ會はして何かこの傳説と關係ある事を思はしむるが今詳でない。

更に光延は俗名を野矢光盛と稱し獵を業としたといふが勿論傳説の人物で劉縣阿育王塔傳説では獵師劉薩訶（註四）に當る人である。故に阿育王塔傳説には缺けてはならぬ人物である。劉慧達に倣つて光延といふ名を附したものであらうがその名は前記日延から思ひ付いたものかとも思はれる。而てこれが獵師であつたといふのは殺生を事とする極重惡人の代表者として出されたもので、廣弘明集第十七舍利感應記には舍利の功德を嘆じて「雖屠獵殘賤之人亦躬念善」等といふ言葉も見ゆるから、この思想を具象化したものと考へらるゝのである。因に望月信亨氏の佛教大辭典阿育王塔の條に石塔寺阿育王塔に就て「恐くは吳越王錢俶が造れるものを訛轉せるに過ぎざるべし」とある。これは誤りで劉縣阿育王塔の訛轉である事は前記した通りである。

（註一）後拾遺往生傳に依ると「其後依付、慶祚大阿闍梨、受三部大法、本師入滅以後、處々修行、浮雲不定矣、三十餘年以降占：前引の文：」とあるから慶祚の寂した寛仁三年十二月から約三十餘年と見ると永承の中頃に當るのである。（註二）曰く、「余如蒲生郡、拜瞻靈塔、高三丈餘、徑可八尺石厚一尺餘、三級九輪巍然出於林表、無辭封傾側而如新削成者、因尋塔緣起、寺主曰、昔聖德太子近江之地建四十八寺、茲寺最後所成、初號成就寺、爾後一條帝、以感夢使中使登山、蹤跡果見塔標在地、

令民鑿開塔基具體而全、從此改額號石塔寺、至今塔之四邊、雖經春夏、不生一艸、余裴徊歷觀、實如其言也、阿育王塔傳説の中多少前記寺記等と異なる點があり、又當時の實狀を知るに有益であるから記す事とした。(註三)後拾遺往生傳前出に依る。(註四)劉慧達は昔から有名な神僧で慧皎の高僧傳第十三釋慧達の條に既にその傳記を出すのがこれに依ると慧達は晉簡文帝の建てた長干寺三層塔の下に阿育王八萬四千塔の一の舍利を掘起したのであつて劉縣王所造塔はこれに修繕を加へたのにすぎない。故に後世の劉縣阿育王塔傳説はこの高僧傳の記事が發展して慧達に附會された事を知り得る。猶慧達の怪奇な傳記は續高僧傳第二十五魏文成沙門釋慧達傳三・神僧傳卷第三慧達の條等にも見えるが何れも劉縣阿育王塔發掘の傳説は傳へてゐない。

### 阿育王塔信仰に就て

一、西域記の阿育王所建塔 阿育王塔信仰は一種の舍利信仰であるが、先づ西域記所記の阿育王所建塔の實際並に傳説を調査して見よう。これは法顯傳・宋雲惠生記等所記の阿育王塔が數も少く又それは西域記所記のそれに含まれてゐるから省略して専ら西域記に依る事にしたのである。

因に前出の註には西域記第一迦畢試國の一基を脱漏したからこゝに附加する。又麻訶刺陀國の五窣堵波は前には五基と計算したがこれは恐らく摩揭陀國の五窣堵波と同じく五頭の窣頭波一基かとも考へられるので前記した定數の明らかなる阿育王塔百三基は差引百基と改められねばならない。

【注意】——とせるは特に所記なきもの

國名	高さ又は材料(數なきものは一基を指す)	舍利	由緒	特別なる外觀又は俗信其他
迦畢試國	一百餘尺	一升	佛受象堅神供養處	
那揭邏曷國	三百餘尺		釋迦菩薩燃灯授記	編石特起刻雕希製
同			昔掩泥之地避大路遂解建焉	



同	二百餘尺		過去四佛說法處	彫木文石頗異人工
健馱邏國			佛爲國王千生爲王千生捨眼處	
同	數百尺		蘇達拳太子本生處	
同			同 右	
同			獨角仙人所居之處	
烏仗那國			毘迦王割身從鷹代鴿處	
同			慈力王刺身血卅五藥叉處	
咀叉始羅國	百餘尺		當來慈氏出世自然有四大寶藏當其所	妄加發掘地有震動
同			月光王斷頭惠施凡歷千生處	至齋日時放光明
同	百餘尺		拘浪拳抉目之處	惡疾除癒盲人祈請多有復明
僧訶補羅國				靈異相繼
同	石・二百餘尺			彫刻奇製時燭神光有疾病旋
同	石・二百餘尺			繞多癒
烏刺尸國	二百餘尺			
迦濕彌羅國	四基	舍利升余		
磤迦國	二百餘尺		過去四佛說法處	
同	石	中有多舍利	如來北方行化中路止處	有齋日時放光明
至那僕底國	二百餘尺		過去四佛坐及經行遺迹	
屈露多國			如來說法度人遺跡	

阿育王塔に關する研究

設多圖盧國

過去四佛坐及經行遺迹

抹克羅國

三基

過去四佛遺迹？

薩他泥濕伐羅國

二百餘尺

一斗(一本)

如來說法度人遺迹

軛皆黃赤色甚光淨光明時照神迹多端

窣祿勤那國

二百餘尺

如來說法遺迹

瞿毘霜那國

二百餘尺

如來為龍王說法處

聖醜掣咀羅國

雖傾百餘尺

如來說法處

毘羅刪拳國

雖傾百餘尺

如來說法處

羯若鞠闍國

二百餘尺

如來說法遺迹

同

二百餘尺

如來說法遺迹

同

雖傾百餘尺

舍利

如來說法處

同

二百餘尺

如來說法處

阿踰陀國

二百餘尺

如來說法處

阿耶穆佉國

二百餘尺

右 同

鉢羅耶伽國

二百餘尺

如來降伏外道處

橋賞彌國

二百餘尺

如來說法處

同

二百餘尺

如來說法處

同

二百餘尺

如來伏毒龍於中留影處

同

二百餘尺

如來說法處

同

二百餘尺

如來說法處

室羅伐悉底國

佛舍利

如來經行之迹說法之處

同

佛舍利

迦葉波佛成正覺已初見父處

右 同

放光明其側有過去四佛座及經行遺迹

其側有過去四佛坐及經行遺迹

右 同

右 同

其側有髮爪窠堵波經行遺迹

其側有過去四佛坐及經行遺迹

傍有如來經行遺迹及髮爪窠堵波

右 同

側有奇樹

並樹旌表建窠堵波靈瑞間起

同	迦葉波佛全身舍利	加葉波佛全身舍利	
切比羅伐窳堵國	釋迦成正覺已還國見父王爲說法處	太子踰城至此解寶衣去纒絡命僕還處	其傍有小窳堵波
藍摩國	大	太子剃髮處	
同			
同	大餘百餘尺	准陀之故宅	
拘尸那揭羅國		如來寂滅之處	
同	二百餘尺	八王分舍利處	
同			
婆羅痾斯國	百餘尺	如來成正覺已初轉法輪處	
同	石・餘百尺	如來說法處	其側有過去三佛坐及經行遺迹
戰主國		如來伏鬼之處	
同		如來說法處	
同	大	如來舍利瓶 (但阿育王開取)	至獵日時燭光明
吠舍盞國		婆羅門所建塔無憂王改築	
同		如來止息遺	其傍有過去四佛經行遺迹
弗栗恃國	百餘尺	如來說法處	
摩揭陀國		無憂王瘞獄趾	基雖傾陷唯余覆鉢之勢實爲 一也靈鑑間起神光時燭 廁節石作欄檻即八萬四千之
同	五窳堵波(五頭窳堵波ならん)	表如來五分法身	印度記曰昔無憂王建八萬四千窳堵波 已尙餘五斗舍利故別崇建五窳堵波 制奇諸處靈異間起(但當時は遺趾のみ、 修建小窳堵波といふ。)

阿育王塔に關する研究

同 石・百餘尺

同 百餘尺

同 大

同 六十餘尺

同

同

同

同

同 大

同 大

同 大

同 大

同 大

同 外猶數基

同 十餘基

同 百餘尺

同

同

同

同

如來演說寶雲經等處

菩薩灌尼連河將趣菩提樹受草處

如來現大神通說深妙法

大衆部結集之處

尊者沒特伽羅叉本生故里

尊者舍利子本生故里

如來說法及化作大鴿授火而死之處

佛三日說法處

如來三日爲天人說法處

如來七日說深妙法處

如來七日說深妙法處

如來七日說法處

右 同

如來說法處

如來現大神通催伏外道處

如來說法現大神通處

如來現大神通說深妙法處

如來巡遊說法度人處

諸窣堵波

諸窣堵波

靈鑿潛被神光時燭

或至齋日時燭光明其側則有四佛坐及經行遺迹

傍有四佛坐及經行遺迹

右 同

側過去四佛坐及經行遺迹

傍有過去四佛坐及經行遺迹

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同	百餘尺		如來說法催伏外道處	其側過去四佛座及經行遺迹
秣羅矩吒國			如來說法現大神通處	崇基已陷覆鉢猶存歲久 彌祈祈願或遂
恭建那補羅國			二百億羅漢現大神通處	
摩訶刺佉國	五窠堵波 <small>(五頭窠堵波なるやも 知れず然らば一基也)</small>		過去四佛坐及經行處	
同	何基か不明		如來遊化聖跡處	
信度國	數十基			
鉢伐多國	四基			
阿點婆翅羅國	六基		如來遊化說法度人聖迹處	
臂多勞羅國	數百尺	舍利	如來昔作仙人爲國王所害之處	舍利時放光明
阿耨國			如來止此夜寒乃以三衣重覆處	
漕矩吒國	十餘基			
安阻囉縛國				

右表に依り阿育王所建之塔は高さ約二百尺を普通とし間々石製のものもあつた事が分る。而て塔の生命たる舍利は十二例を除いて其所記がないが、これは恐らく舍利がなかつたからと解するのが至當であらう。果して然らば其他は舍利のない塔即ち制底 (chaitya) と稱すべきものであつたのである。即ち阿育王塔は大抵制底塔であつたのであるがこの事はその由緒を見ると一層明らかである。由緒を分類して見ると佛傳關係のもの四十九例、本生關係のもの十二例、過去四佛關係のもの六例、迦葉波佛關係二例、雜六例となり、佛傳關係のものが大多數を占むるから阿育王所建之塔は

第一に佛の遺蹟に建てた紀念塔といふ事が出来る。紀念塔は所謂制底であるが、その遺蹟も實際の遺蹟といふよりもむしろ傳説上の遺蹟である場合が多く、殊に西北印度に於ては本生關係の例が多く見られるのも興味がある。又過去四佛關係の遺蹟は單に六例にすぎぬがその下欄に於て其側に過去四佛遺蹟塔がある場合は略二十例を數へる。これは阿育王所建塔以外の塔にも見らるゝ所であるが過去四佛の遺蹟とは本生の遺蹟等と同じく佛敎に因縁ある聖地を意味するものと思はれるから、要するに佛傳關係の遺蹟と同じ意味を表すものであらう。故に由緒の點から考へると阿育王塔は制底でありしかもその地に佛敎が興隆する事を豫示する聖地にその表徴として建てられたものといふ事が出来る。更に舍利ある塔で齋日等に於て光明を放つ例が六例(舍利ある塔十二例の中)あり、舍利に關する所記なくして放光明を傳ふるもの四例がある。又俗信として靈異を傳ふるもの六例及疾病等平癒の俗信を有するもの二例であるから塔に對する當時の俗信を徹し得るが、これも阿育王所建以外の塔にも往々見る所である。

而て印度古代の大塔は Sanchi 大塔(註一)の如き塔であるがこゝに石窠塔波と記せるは Horia 石窟内の石塔等(註二)を擴大したものと考ふるを得べく、更に右表中二例のみに特にその形式に於て他と異なるものがあつた事を示してゐる。又五頭窠塔波が二例(一例は摩揭陀國・一例は摩訶刺陀國のがそれらしい)ばかりであるがこれは五の傘蓋を樹てた塔から發達した形態と考へられる。(後記 參照)

以上を概観するに西域記所記の阿育王所建塔は他の塔とその制に於て傳説信仰に於て阿育王所建と傳ふる以外には殆んど異なる所がない。換言すれば西域記所記の窣堵波は概ね右の阿育王所建之塔と類似するものであるから、これに依つて當時の印度に於ける舍利信仰の實狀を推知し得るのである。(猶右表を作製したのは玄奘西遊當時の阿育王塔傳説の分布狀態を攻へるのが主眼であつたので凡そその分布は印度及中亞方面にも及んだ事が知られる。而も西北印度方面と中印度方面以下とは傳説内容に可成り相異がある事が注意される。)

二、土中出現傳説 前記した如く印度の阿育王所建之塔は地上に立てられた相當高い塔であるが支那日本に於ける阿育王塔は地から涌出したといふ傳説がありそれに附隨して種々の人物が出て來るのを定型とする。而てこの傳説の裏には尠くとも此等の阿育王塔は始め地中に埋められたものだといふ事實を看取する事が出来る。しかしかゝる土中出現傳説は阿育王塔に限らず佛塔殊に多寶塔又は寶塔に共通な傳説の様である。例へば法華經見涌出塔品に見る如き涌出寶塔の思想はこれまたその一表現と見る事が出来る。金光明經第四にもその例があり沙彌塞律第三十卷には「塔今猶地中」等と記すのである。更に覺禪鈔の造塔法上塔與窣堵波差別事の條には「都執異論疏第二云阿闍世王得舍利得舍利將遠果、於舍城於七葉巖中堀地、深十餘丈、於地下起七層塔云云」等とも見ゆる。これは舍利崇拜の發達した結果起つたものと思はれるが、所謂窣堵波はその地中の聖なる舍利の表徴として建てられたものである。所がその舍利は生ける佛身それ自體であるといふ思想を生じ、生ける佛であるから、又縁に觸れて大いなる靈瑞を現はし給ふものであるといふ思想に發達した。この靈瑞

の思想が發達すると今度は逆に舍利のある所からは縁に觸れて寶塔が涌出するといふ考が起つて來たものゝ様である。而てその舍利とは元來佛骨を意味したが漸次その意味が擴充されて佛の遺物に及び遂には法舍利の思想が起つて來た。法舍利とは法身偈・縁起法頌・法頌舍利・法身舍利等ともいひ馬勝比丘の説いたといふ諸法緣起頌をいふのであるが、佛舍利の代用として塔中に經文を籠める時これを用ふるからこの名がある。所で印度では古くこの法舍利を納めた泥塔を造る習俗があつた。即ち西域記第八摩揭陀國の條に「印度之法、香未爲泥、作小窣堵波、高五六寸、書寫經文、以置其中、謂之法舍利也、數漸盈積建大窣堵波總聚於內、常修供養」とある。法舍利が初めから馬勝の諸法緣起頌をのみ意味したのか、或は又初めは單に經文を書寫して塔に納めるのを法舍利と稱し、後普通にこの諸法緣起頌をのみ指す様になつたのか、今それを詳にし得ないが、とに角、多數の泥塔に法舍利と稱して經文を納め、それを中に納めて大塔を建てた事を知り得る。かゝる法舍利を納めた泥塔を阿育王が造らしめたか否かは詮索の限りではないが、恐らく阿育王造建の八萬四千塔とはかゝる泥塔の風習から起つた傳説ではあるまいか。憶測に依れば、恐らく此の風が盛となるに及んで阿育王に附會したものだと思ふ。小野玄妙氏は阿育王造建の八萬四千塔について

「但し一日のうちに造作された八萬四千の塔といふのは予の憶測にては是は上記の（阿育王所建の寺及塔）の造建の事をいふ。（史實以外に王が更に幾多の小塔を作つて邊陲の地に流布したのであらうとの消息を傳ふるものならずやと思ふ。」註三



といはれたがこれは西域記の前記摩揭陀國の阿育王所建之塔に「八萬四千之一也」とあるを信する時かゝる小塔を造つたのではない事を知り得るばかりでなく更に又かくては後世の阿育王塔の土中出現の傳説を説明するに困難である。それで予は泥塔の風俗と結び付けて考へて初めてこの傳説を解釋し得ると思ふのである。猶印度のこの風俗には又大塔を建てずかゝる泥塔等を造つて空野に放置して功德と爲す事もあつた。即ち南海寄歸傳卷四に依ると

「造泥制底及模泥像、或印絹隨處供養、或積爲聚以博棄之、即成佛塔、或置空野、任其銷散、西方法俗、莫不以此爲業、又後凡造形像及制底、金銀銅鐵、泥漆甄石、或聚沙雪、當作三時中、安二種舍利、一謂大師身骨、二謂緣起法頌(中略)其利益不可思議、若人造像、如穢麥、制底、如小棗、上置輪相竿若細針」

といふから印塔の起源も印度にある事が知られて面白いが、空野に放置するといふのが恐らく段々變つて地中に埋める様になつたのではあるまいか。或は印度に於て大塔の中に納め又は空野に放置する風俗が支那に來て金塗塔を埋めた様に埋める風俗に變つたのかも知れない。かく埋める事を功德とする思想が生ずる以前に埋められた塔から寶塔の如きが涌出したといふ様な傳説が先行してゐたとも考へられる。かくて嘗て埋められた塔が涌出するといふ靈瑞傳説と、又現在に於て埋めて未來の功德を積むといふ信仰が並び行はるゝに至つたと致へられるが、果して然りとすればかの經塚の如きもかゝる思想信仰と深い關係があるのではないかと考へらるゝ。

而してこの法舍利の信仰は猶義淨譯の浴佛功德經・佛本行集經卷四十八・大智度論卷十八・谷響集

卷四等にもその説が見られるが、この信仰は數に於ては大數を喜ぶ信仰である。我國上古に行はれた百萬塔・十萬塔の如きも勿論この信仰から來てゐる事は確かであるが、今は略するとして、八萬四千塔といふのもやはりこの信仰である。後記する様に我國では平安朝中期以後八萬四千泥塔を造つた例が屢々史上に見ゆるのは印度の泥塔に倣つたのであつて、又その數を八萬四千と定めたのは阿育王所建塔の傳説に倣つたものに相違ない。勿論この風は支那を経て我國に傳はつたもので支那唐代の泥塔と考へらるゝものが現存する。(大坂山中商會支那古陶金石展觀列品中に二箇あつた。)それは、相輪部を缺除した四寸位の四角寶塔で木造寶塔を模したものである事は四壁に柱・襪子窓・束等を表はしてあるので知る事が出来る。然もその四壁に各一體の佛立像を表顯してゐるが屋蓋の上には覆鉢形の露盤を置いてゐる。

印度に於ける泥塔がいかなる形のものであつたか寡聞にして今日その遺品の存在を聞かないが、(燉煌には印塔印像の遺品が出土してゐるが)前引の南海寄歸傳に「制底如小棗、上置輪相竿若細針」とあるのを思ひ合はす

と、これほど精巧ではなかつたにしろ恐らくこの類の寶塔形の小塔であつたらうと思はれる。我百萬塔は木製層塔であるが、これらの泥塔は層塔ではなかつたのである。今百萬塔と此等の泥塔の由來を比較研究する違を有しないが、恐らく多少その間傳來を異にするものがある様である。而て所謂寶塔とは珍寶を嚴飾せる塔の義で單層を普通とし大小及び種々の形式があるが、これに層が加はると多寶塔と呼ばれる。所謂多寶塔は重層のものを指すのであるが、これが必ずしも重層に限らない

事は我長谷寺法華說相版に於ける多寶塔が四層である事に依つても知られる。因に法華經では多寶塔とは多寶如來の全身舍利を安置して涌出した寶塔を名づくるのであるが、一般には寶塔に多層あるを示し或は七寶等の多くの珍寶を嚴飾した塔の謂である。而してかゝる寶塔が土中より出現するといふ様な傳説は前記した如く舍利信仰から起つた傳説であるがその意味する所はその地が佛教に因縁の深い聖地である事を示すものと思はれる。前に印度阿育王所建塔の由緒に見た如き聖地に建てられた阿育王塔は傳説として承け傳へられその意味だけが強く民衆に印象して、終に變じて聖地を表はす舍利(骨舍利法  
舍利を含む)の存在となり、更に轉じて阿育王塔の出現を結果する事となつたものゝ様である。しかもその出現塔の舍利を存在せしめたものは阿育王であるが、これは阿育王を鐵輪王と同一視する信仰から發祥したものである。鐵輪王は轉輪王 (Cakravartin) の輪寶の一なる鐵輪を感得して南閻浮提の一洲を統御する帝王と信せられたが、佛教世界觀に於ては吾人の位する世界は南閻浮洲と信せられたのであるから、古代の佛教文化圏の理想的君主としての阿育王はそのまゝ鐵輪王と信せられ、かくて支那、日本は勿論全世界は嘗て阿育王の統治の下にあつたと信じたのである。かゝる佛教世界觀上の理想的綜合君主たる阿育王の時代を回顧するの情は當時の支那・日本の佛家に頗る濃厚であつたから、その回顧の情から、遂に阿育王が全世界の聖地に散布したといふ舍利の存在を信する傳説を形成するに至つたものと思はれる。この阿育王を鐵輪王と同視する傳説は

佛陀の懸記として阿育王經以下に説く所で前引の支那・日本の阿育王塔の大抵の緣起に見ゆるが更に法苑珠林第三十八の支那二十一阿育王塔の隨一たる高麗遼東城傍塔緣起等にも見ね、更にその緣起から出たと思はるゝ唐道宣の集神州三寶感通錄(大正藏史傳部四)所載の同塔緣起を引用した三國遺事第三の同塔緣起にも更に具に記されてゐるから當時の信仰を窺ふ事が出来る。即ち

「古老傳云、昔高麗聖王按行國界次、至此城見五色雲覆地、往尋雲中、有僧執錫而立、既至便滅、遠看還視、傍有土塔三重、上如覆釜、不知是何、更往覓僧、唯有梵草、掘尋一丈、得杖并履、又掘得銘、上有梵書、侍臣識之云是佛塔、王委曲問詰、答曰、漢國有之、彼名蒲圖王、因生信、起木塔七重、後佛法始至、是知始末、今更損高、本塔朽壞、育王所統一閻浮提州、處處起塔、不足可怪、(中略)按古傳育王命鬼徒、每於九億人居地立一塔、如是八萬四千於閻浮界、內藏於巨石中、今處處有現瑞非一云云」

と。こゝには鐵輪王の名は見ねぬが思想としては鏑輪王と同視してゐる事は「育王所統一閻浮提州」とあるから明かである。(猶阿育王を轉輪王と同視する信仰もあつたが何れも同じ意味である。)

而してこの土中出現の信仰が支那日本に於ける塔を埋めて功德とする信仰となつた事は前記したがその信仰が發展して供養の思想となり寶篋印塔を樹つるに至つたと考へらるゝ。しかしこれは寶篋印陀羅尼を納めたから名づけられた名でそれ以前は別にかゝる名は無く矢張り寶塔といはれたのであらう。既に錢弘俶の金塗塔には寶篋印心咒經を納めたのであるから、それ以前から、法身偈の代りに、同じく佛身そのものと考へられた寶篋印陀羅尼を納める風があつたものと考へらるゝ。こ

れに就ては密教に於ける舍利信仰の歴史を詳にする必要があるから到底こゝでは記す違がないが、とに角法身舎利の信仰が變形したものである事は疑ない。更に我國では鎌倉の末頃若は南北朝時代頃から寶篋印塔は供養としての外に墓標の代用としても用ひらるゝに至つたのであるが、盛に行はれる様になつたのは徳川時代以降でこれはその形態が一種變つた所があるので豪族に喜ばれた爲らしい。(註四)

**三、燃指供養** 剽縣阿育王塔に燃指供養が行はれてゐる事は前記したがこれは舍利信仰に共通した現象で前記五臺山にも王子燒身供養の例があり又參天台五台山記第五延久四年十二月一日の條に崇基和尚が「燒左手無名指供養」といつてゐる事を記してゐるから、五台山にも行はれた事が分り檢索すれば例は多いであらう。恐らく印度の婆羅門の風から來たものと思ふが今は省略する。

**四、遶塔傳説** 塔を遶るといふ事は多くの功德ある事として右遶佛塔功德經等にその説が見え又法苑珠林卷卅七には如菩薩本行經を引いて「旋塔有五福德」(註五)としてその功德を説いてゐる。印度の大窣堵波には遶塔の道がある事等と思ひ合はすと昔から盛に行はれた事が知られ西域記法顯傳等(註六)にもその例が見え五台山にもその例が(註七)あるが石塔寺阿育王塔にもその面影が残つてゐる。即ち拾芥抄に本朝五奇異の一としてこの石塔をあげ「近江蒲生石塔・昔阿育王諸鬼神をして八萬四千の塔を作らしむ。是其一なり、毎年大蜂群集して此塔に行道すと。」見えてゐる。蜂も昔から

怪異を傳へられる場合が多いから(註八)これもその例と見る事が出来よう。我々はこれに依つて室町時代に於ける阿育王塔信仰の一般を知る事が出来ると共に又石塔寺阿育王塔が佛塔傳説に共通な奇異を具備してゐる事を知り得る。猶遶塔の事は塔に限らず佛身又は伽藍其他を遶る事が屢々見られるから印度の土俗と關係があるのであらう。日本にもこれに類した物の周りを廻る土俗が行はれてゐる事は周知の事で、これは全く土俗學の方面から説明さるべき事と思ふが今は略する。(註九)

六、**剽縣阿育王塔に對する我國人の憧憬** 前にも記した如く齋然・寂照・成尋等は日支交通史の著者が第一類に分類した(註一〇)後の入唐僧重源・榮西(第一回)安覺・良祐等と同じく圓仁・圓珍其他の入唐僧と異り滅罪の爲聖蹟巡拜を志したのであつて、これは我國に於て平安朝中期から行はれた西國三十三所觀音巡禮等を支那へ擴張して行つたものとも考へられる。この聖蹟巡拜は主として自己の罪業消滅の祈願の爲に行つたもので(註一一)あるがこゝには特に源平時代を中心として支那阿育王塔に對する當時の人士の憧憬を文献に依て考へて見やう。先づ平家物語・源平盛衰記等に依ると平重盛が三千兩を宋へ渡し自分の後世を弔はしめてゐる。(註一二)これは逆修の思想に依つたもので自己の罪業消滅の爲である。しかしこれは後世の傳説で事實ではなかつたものゝ様であるが(註一三)更に吾妻鏡に依ると源實朝も自分の前生が育王山の長老であつたといふ事を聞いて宋に渡り阿育王寺に參詣せん事を願ひ陳和卿をして大船を造らしめた。(註一四)不幸にして船が浮ばなかつたので沙汰

止みとなつたが(註一五)これは吾妻鏡の所載であるから確實で實朝の如き當時の識者がかくも熱烈に阿育王塔を憧憬したのにはよほどの理由がなければならぬ。重盛も何か育王山と關係があつたものであらう。又東大寺大勸進として知られた俊乗坊重源は入宋三度に及び阿育王山に參つて前記の阿育王塔の舍利を拜禮したのであるが(註一六)更に周防國の材木を送つて舍利殿を造立し自分の影木像畫像二軀をその中に安置し香華等を供へたといふから(註一七)阿育王塔に對するその熱烈なる信仰を窺ひ知るべきである。猶前記榮西及其後の心地覺心・無象靜照・約翁德儉・樵谷惟遷・桃溪德悟等の入宋僧は皆この寺に掛錫したのであつた。(註一八)

思ふに前記した如く阿育王寺が我國と支那との交通上尤も重要な關門であつた明州(註一九)の港から僅か五十支里の地にあるといふ事がかくも我國人に阿育王塔に對する憧憬を唆らしめた最大の原因であらう。而して此の憧憬が近く江州石塔寺に阿育王塔を出現せしめた事は前記したが前出兵範記等に依り江州阿育王塔に對する崇拜の一般を知り得る。蒲生郡志の著者が「造寺造佛の隆盛なりし時代に阿育王塔の靈説は社會の信仰を蒐め遠近の老若群集して崇○拜○者○の○影○雲○の○如○し。」(註二〇)といさゝか誇張文飾にすぎた嫌があるが後の拾芥抄(前出)等に見ても又龍溪禪師(註二一)佛頂國師(註二二)寂室禪師(註二三)等の石塔寺に題した詩・更に前出本朝高僧傳等にその信仰の一般が窺はるゝ。因に司馬江漢が此寺に詣した事は(註二四)一面又此塔が有名だつた證左となる。

## 二、八萬四千塔の造立

我國には古く天平寶字八年孝謙天皇の御願に依り無垢淨光大陀羅尼經の所説に従ひ木製小塔百萬基を造立し(註二五)所謂百萬塔と稱せられるが保安三年四月には白河上皇の御願で五寸の小塔三十萬基を造つた。(註二六)其他多數の小塔造立は史上に屢々見ゆるが何れも大抵十萬基内外である。然るに藤原時代から此等の百萬・十萬基等の小塔とは別に小塔八萬四千基造立の事が屢々史上に見えて来る。小塔を數多く造るといふ事からいへば百萬塔も八萬四千塔も同じ意義を有するのであるが、これを八萬四千塔としたのは阿育王塔の故事に倣つたもので例へば山槐記文治元年八月二十三日の條には後白河法皇が先に諸國に命じて造進せしめられた小塔八萬四千基を長講堂に供養された事が見えてゐる。玉葉に依るとこれより先養和元年十月十四日の條に「院藏人來催云來月十八日可<sub>レ</sub>被<sub>レ</sub>供<sub>ニ</sub>養八萬四千基塔<sub>一</sub>、其内五百基可<sub>レ</sub>令<sub>ニ</sub>造進<sub>一</sub>寸法五寸云云各可<sub>レ</sub>奉<sub>レ</sub>籠<sub>ニ</sub>寶篋陀羅尼一反<sub>一</sub>云云」と見ゆるからこれは明に前記錢弘俶の金塗塔に倣つたものである事は寶篋陀羅尼を收めた事で證し得る。更に元暦二年六月廿四日の條には「院藏人來催<sub>ニ</sub>八萬四千基塔事<sub>一</sub>」等と見えてゐる。から何かの事情で供養が遅れて同年(文治元年)八月二十三日に供養が行はれたのであらう。但し玉葉には供養の記載がない。次に吾妻鏡を見ると嘉祿元年九月八日の條に「於多胡江河原(註二七)被<sub>レ</sub>立<sub>ニ</sub>八萬四千基石塔<sub>一</sub>云々」と見ゆる石塔 八萬四千基を造つた事が分り、同仁治二年七月四日の條には「今日於<sub>ニ</sub>御所御持佛堂<sub>一</sub>爲<sub>ニ</sub>將軍家息災御祈<sub>一</sub>、有<sub>ニ</sub>八萬四千基泥塔供養<sub>一</sub>導師宮内仰僧



都承快」と見れば、寛元三年二月廿五日の條に「於久遠壽量院被<sub>レ</sub>供養八萬四千基泥塔法印圓  
意爲<sub>二</sub>導師<sub>一</sub>諸大夫等取<sub>二</sub>布施<sub>一</sub>、聽聞導俗群參如<sub>二</sub>垣<sub>一</sub>」とあるから、泥塔八萬四千基を造つた事を徵し得  
るとともに、その盛儀を窺ふ事が出来る。更に同書文應三年十二月十八日の條には「依<sub>二</sub>將軍家御願<sub>一</sub>  
被<sub>レ</sub>供養八萬四千基塔、導師尊家(宗)法印」と見ゆるが、當時の將軍は宗尊親王である。檢索すれば  
もつと例もある事であらうが、今は以上に止める。此等の例に依つて見るに、恐らく八萬四千塔は初め  
錢弘俶造塔に倣つて、木石等に依つても造られたらしいが、後には専ら泥塔として造られたもの、様で  
ある。その造立の目的は何れも寶篋印陀羅尼經(具に一切密全身舍利寶篋印  
如來心祕陀羅尼經といふ。)所説に依り貧窮の報を滅し  
富貴となり、萬病を一時に消滅せしめ、壽命延長福徳無盡ならん事を願ふのであるが、特にこの經に  
「若有<sub>二</sub>惡人<sub>一</sub>、死墮<sub>二</sub>地獄<sub>一</sub>、受<sub>レ</sub>苦無<sub>レ</sub>間、免脫無<sub>レ</sub>期、有<sub>二</sub>其子孫<sub>一</sub>、稱<sub>二</sub>亡者名<sub>一</sub>、上神咒纔至<sub>二</sub>七遍<sub>一</sub>、洋銅  
熱鐵忽然變爲<sub>二</sub>八功德池<sub>一</sub>」とある如く、この陀羅尼は地獄の苦を免れしむる功德があると信せられた  
ので、この陀羅尼を納めた八萬四千塔を造立するに至つたのであらう。因に寶篋印陀羅尼を供養し  
た例は壽永三年(元曆  
元年)四月八日藤原兼實が故關白忠通の墓に供養した事が玉葉・吉記・百鍊抄等に見  
ゆるから、この頃から行はれたもの、如く又意味は同じであるが、單獨の石造寶塔としての寶篋印塔の  
造例は鎌倉初期と鑑定されてゐる豊後臼杵の大寶篋印塔(後記)の如きが最古のものであらう。

而して室町時代になると、印塔としても行はれたもの、様で東寺百合文書の中文明四年十二月九日

の日附ある。「渡申光明講方出世道具目錄」には「一、版塔本二八萬四千基版等萬タラ版是也」等と見るのである。因に京都東山法然院萬壽寺に阿育王塔と稱する塔があり、滋賀縣伊吹山近くの阿育王塔をその儘模して造立したものだといふ事であるが大日本地名辭書法然院の條に「門前に阿育王塔と名づく古石碣あり」と記されてゐるだけで滋賀縣のそれに就ては何等記す所なく又他の地誌類にも一向出てゐない様であるからその傳説を知り得ない。恐らく後世の附會であらうと思はれるが詳でない。或は前記滋賀縣奥島にあつたと傳へられる阿育王塔であるかも知れぬが今は調べてゐないから後日に譲る。

(註一、二)天沼先生寫真に依る。(註三)佛教の美術及歴史所收前掲論文六二四頁。(註四)墳墓又は墓標の變遷に於ては最近考古學講座中墳墓の講座にその説があるが鎌倉後期で終つてゐるから寶篋印塔に就ては殆んど論ぜられてゐない。故平子尙氏の佛教之藝術所收本邦墳墓の沿革六二七頁以下に寶篋印塔に關する説がある。但し鎌倉末頃以下のものは後にも記す如く徳川時代以降のもの、如く塔身が二重になつてゐないのである。(註五)一、後世得端正好色。二、得聲音好。三、得生天上。四、得生王侯家。五、得泥洹道、猶その一々に就て説明がしてある。(註六)例へば西域記卷第三、僧訶補羅國の條、猶法顯傳では拘薩羅國舍衛城の條下に「繞佛精舍三市供養」摩揭陀國の條下に「五百青雀飛來遶菩薩三匝」等と見えるから佛塔ではないが同じ形式と見る事が出来る。(註七)古清涼傳卷下遊禮感通西域梵僧釋迦蜜多羅の條下に「僅登台山、見白兔狐達塔、而滅即於塔前五體布地」等と見えて居り外にも例がある。(註八)扶桑略記卷二十五、古事談卷三に傳へらるゝ、東大寺彌索院に蜂堂に滿つといふ様な傳説又は今昔物語卷二十九鈴鹿山に於て蜂盜人を蝥し殺す語第三十六、蜂蜘蛛の怨みを報ずるに擬する語第三十七其他廣隆寺緣起等に見える傳説。(註九)中山太郎氏著土俗私考所收「物の周りを廻る土俗」參照、但しこれには佛教に關した方面には少しも觸れてない。(註一〇)同書下卷三七頁參照。(註一一)例へば、前引寂照の入宋の本願の如き又成尋の入宋の動機(朝野群載卷二十「聖人申渡唐」に依る。)の如き皆その例とする事が出来る。猶これには當時の地獄の思想を參酌せねばなら

ぬ。地獄の恐怖を我國人が痛切に感じ出したのは何時頃か俄に斷じ難いが當時既に、燉爐で發見された十王經の如き又それに附された地獄の繪圖等の如きが舶載されてゐたと考へられるから、それらに依つて地獄への恐怖が強く識者の頭を悩ました事であらう。聖蹟巡拜は實にこの地獄の恐怖から逃れる一つの道でもあつたのである。因に當時行はれたと思はれる源信作と傳へる八塔和讃(天台靈標初編卷之四、源信撰述目録、佛教全書本、九九頁、この和讃の古寫本は高野辰之博士所藏と聞くが氏の日本歌謠集成にも收められてゐない。不審である。)の如きもその名から考へると恐らく印度の八大靈塔等の靈驗を歌つたものであらうと考へらるゝ。果して然らば當時觀音巡拜等の外にかゝる舍利信仰から出發した塔巡拜の存した事が知られるがこれの實例は山槐記治承三年二月十二日、廿三日、廿四日、廿五日の條治承四年三月七日、同廿一日、廿二日、廿三日の條等に見え延齡等の祈願の爲に百塔を三箇日に禮拜して廻り所摺之塔即印塔を供養した事等を記してゐるので明らかである。又當時佛塔高顯の信仰が存した事は明惠上人歌集の中等にも見られる。これも當時の靈塔巡禮等と思ひ合はして舍利信仰の盛行と見るべきである。(註一二)平家流布本卷第三金わたしの事(但し長門本にはない)盛衰記留卷第十一育王山に金を送る事の條。

此の時の使妙典(又は妙傳)が現在九州宗像神社にある國寶阿彌陀經石碑を將來したといふ傳説も後世行はれたがこれは單なる傳説にすぎぬらしい。長沼賢海氏日本宗教史の研究所收宗像神社の阿彌陀經石九〇七頁参照)。(註一三)大日本史重盛傳には育王山獻金の事を否定してゐる。これは重盛が宋醫を拒んで國體を尊重した事があるのを證左とした説であるが宋醫を拒んだといふのも盛衰記の説であるからこれには同意し難い。しかし平家・盛衰記共に此の育王山獻金の事を有名な重盛の燈籠の事の次に出してゐる所から考へると兩傳説共その發生を同じくしてゐるものゝ様である。或は前註長沼氏論文に論ぜられた如く當時育王山の徳兄寂照禪師は淨業に秀で阿彌陀經義疏の著があり廣く我國にも知られたから、遂に重盛育王山送金の事をいひ出したものかも知れない。果して然らば我石塔寺阿育王塔傳説もこの徳兄寂照を我入宋僧寂照と同視する事に依つて起つたものかも知へられる。即ち寂照の五臺山參詣傳説はそれだけが單行して流布され後にこの同視に依つて劍縣阿育王塔を附會したものであらう。かく考へると育王獻金の事も石塔寺阿育王塔傳説も共に盛衰記に著録せられてゐる事は偶然の一致ではなくてその間何か關係の存する事を暗示するものといへやう。(註一四)吾妻鏡卷二十二、建保四年六月十五日、同十一月二十四日の

條。(註一五)同書卷二十三、同五年四月十七日の條。(註一六)玉葉三十八、壽永二年正月廿四日の條。(註一七)南無阿彌陀佛作善集、橋川教授の指示に依る。(註一八)允滲入唐記參照、日支交通史下卷四七頁參照。(註一九)日支交通史下卷八、九頁參照。(註二〇)近江蒲生郡志卷七、五一四頁。(註二一)石塔寺、育王塔現淡江東、寶石鑄成非世工、尊者指光摩利禰、眞身舍利古今同、八祥六勝具靈地三級九輪冲太空、再拜勤稟春日晚、也知花柳受遺風。(註二二)題阿育王塔、育王鑄就石浮圖、八萬四千不換模、誰料扶桑那畔地、天留一箇鎮迷衢。(註二三)題阿育王塔、(石塔寺)、誰知育王迹、遺斯日域隅、深欽弘濟化、肅敬拜浮圖猶寂室が石塔寺に假寓した事は次の詩に依り明らかである。與翼姪訪石塔客居、道人踏雪間寓舍、月照寒窓坐對牀、瓦鼎烹茶春一盞、豈同政老橘皮湯(蒲生郡志卷八・五六五頁所引に依る)。(註二四)江漢西遊日記(日本古典全集本)六一頁、猶五九、六〇頁には塔の寫生圖を出してゐるから面白い。(註二五)續日本紀卷第三十、寶龜元年夏四月戊午の條に天平寶字八年發願された百萬塔が完成した由見えるからその間前後七年を費した事が分る。(註二六)百鍊鈔第五。(註二七)三浦九郎胤義の子四人がこゝに斬られた事等が承久記に見えるから刑場だったのであらう。現在の多胡河が海に注ぐ邊をいつたものと思ふが八萬四千基の塔を造つた遺蹟は今詳でない。(大日本地名辭書に依る。)

### 阿育王塔の形態に就て

先に引いた金塗塔に就いての徳清の記に「如式造小銅塔八萬四千座」といひ又「如阿育王塔式」といつてゐるのはこの金塗塔が阿育王塔の形式に模したものである事が知られるがこれが日延に依り我國に將來さるゝ先、既に唐大和上東征傳に依ると鑑眞が「阿育王塔様金銅塔一軀」を將來してゐる。こゝに塔様と見わるのは塔模型或ひは塔雛型圖の意に解せられるが前記の塔式と同じく阿育王塔に一種の形態があつた事を示すもので即ち所謂寶篋印塔の如き形態を指すものと思はれる。而してこの阿育王塔の形態の原型に就いては前出法苑珠林等の記事に「似西域干闥所造」とあるのが管

見の及んだ限りでは唯一の文献である。法顯傳に依ると干闥には「家門前皆起小塔最小者高二丈許」とあるから非常に小塔が多かつた事も知られるがその形が如何なるものであつたかは文献を缺いてゐるから不明である。たゞ Stein 氏の干闥の東樓蘭 Lou-lan 發掘物に二個の木片の塔模型 Stupa model があるがこれは相輪部の高い所謂寶塔形である。故に干闥の小塔が石塔か木塔かこれを詳にし得ないが恐らくかゝる寶塔の類であつたらうと推測(註一)される。然らばかゝる寶塔の形態はいかにして生じたのであらうか。阿育王當時の造建といはるゝ Bharhut 塔欄南門隅柱側面の塔禮拜の浮彫に見ゆる塔は(註二)その形が Sanchi 大塔や Kati 窟寺塔(註三)の如き所謂覆鉢形の上に欄楯を設け又は表し且つ傘蓋を立てたものから發達した形式ではあるが、その覆鉢形が甚しく退化して欄楯の上部に窟龕形を表し(欄楯の内部は平頭又は方龕と稱し遺物を容れる箱であるからその部分に窟龕の形を表顯したのである。)上に方形の板石を四段に積み重ね最上部に二層の傘蓋を表はしてゐる。又覆鉢の下部にも欄楯が(大塔では邊塔の道を圍む欄楯。)あり下に蓮瓣様のつなぎ文様を現した臺があり更に薄い三重の基壇の如き方形の石を積み重ねてゐる。寶鉢の上の方形の三段の板石は天沼先生に依れば軒裏の料拱を表はすもので Kati 窟寺塔にもあり又 Flora 窟寺の塔(註四)にも見受けられるが此の浮彫塔ではその制を受けつゝよほど變形してをり、殊に窟龕形を表はしてゐる所に舍利が崇拜の對象として佛自身を表徴するに至つてゐる事を認め得る。猶こゝに奇とすべきは料拱を表はす三段の石の上にある最上部の板石の上の周邊に何か小さい前面から見

て三角形のものを數箇並べ載せてゐる事である。この最上部の板石は建築本來の意義からいへば屋蓋に當るのであるがこの三角形のものは軒の反り返りを表はしたものか或は軒の四邊に何か裝飾のある事を表はしたものでか何れかであらう。とに角これが後發達して寶塔中所謂寶提印塔上部四隅の突起物となつたものと考へられる。この塔は浮彫であるから塔全體に種々の文様を刻し上に飛天、下に幢幡を樹て左右に供養者を出し菩提樹及柱を表はしてゐるがこれをたゞ覆鉢形を方形に改め浮彫塔に欄楯の上にあつた窟龕をこの方形の部分に移し欄楯を省いて了ふと寶篋印塔式の塔となるのであるから意味としては何等異なる所はない。後西北印度方面では塔の上部は發達して寶瓶を載せて高い擦柱を有する所謂相輪となり又支那では樓閣建築に結び付いたから上部だけが樓閣の上に乗る事になつたのである。それも樓閣の最上部に載るのであるから覆鉢の如きも頗る退化して單に形を止めるにすぎず、塔の四面に表はされたと考へられる四佛又は四本生等は何れも樓閣の部分に安置若は造顯されるに至つた。しかし今はかゝる樓閣建築に適用された塔の形を論ずる邊はないが後記する如く寶塔は *Pauchi* 大塔等の原型を傳へそれを縮模して造建されたと考ふべきである。これに就いて天沼先生は次の様な意見を語られた。*Singh* 大塔の如き形態の塔の傘蓋(後の九輪)を表はす輪の最下部のものが發達して屋蓋となりその下の欄楯覆鉢形をそのまゝ止めたのが所謂寶塔である。この寶塔は日本に残れるものでは大抵石製で屋蓋の下に欄楯を浮彫し所謂塔身(大塔では覆鉢形)の四面

に扉を付けるのを普通とする。扉をつけるのは勿論中に四佛又は四本生等の安置されてゐる事を表はしてゐるのであるが又梵字を刻する場合もある。何れも同意義である。而してかゝる變化を來したのは寶塔(塔身が變形して二重になつたもの)の圓形の塔身を方形に改め積み重ねたもので全く、寶塔に倣つたものである。支那では元時代の作と推定される杭州靈隱寺飛來峰の彌勒像の一侍者たる羅漢が捧げてゐる小寶篋印塔の如き(註七)及同時代の普陀山の太子塔(註八)の如きが古い方であらうと思ふ。而しこれと同じ様な様式で多層となつてゐる物には我長谷寺法華說相版浮彫(註九)の塔の如きがあり支那にも唐貞觀六年の造立に係る河南安陽縣寶山靈泉寺の靈祐法師爪身塔(註一〇)の二箇の浮彫塔の如き燉煌壁畫中の石造と思はるゝ塔(註一一)等の如きはこの例であつて何れも屋蓋の隅に反り花様の文様ある突起物をのせてゐる。猶この種の塔の發達を攷ふべき物として燉煌壁畫中の二佛并座の塔(註一二)をあげることが出来る。これは頗る簡單な形式で軒四隅の突起の外に眞中にも唐草様の文様を有する突起物を表はしてゐる。而して併座してゐる二佛は釋迦多寶二佛であらうから我法華說相版の如き思想を表はすものと考へられるが、果して然りとすればかくの如き簡單なる寶塔式の塔より法華說相版に見る如き堂堂たる多寶塔(多寶塔を稱せられるが一般にいる寶塔多寶塔の何れとも異つてゐる)に發達したと考へられる。こゝに翻つて燉煌壁畫中の前出五台山の「阿育王瑞現塔」を考へて見るとこれは支那風の屋蓋を持つた石造寶塔形でこの外によく似た石造らしい寶塔も散見(註一三)してゐる。所がこの形は同圖の「大法華之寺」

とある伽藍圖の木造多角形の大寶塔(註一四) (法隆寺夢殿の如き榮山あるが高き相輪を有するか 寺八角堂の如き形ではら寶塔の一種といへやう。) 塔と同じ形式でそれを縮模し圓形としたに過ぎないから法華經の寶塔は塔それ自體としては前記の如き寶篋印塔式の寶塔もあり所謂寶塔式のものも共通して行はれた事を知り得る。しかし果して五臺山にかゝる形式の塔があつたか否かは疑問である。或ひは燉煌地方にあつたものをそのまま寫したのではあるまいか。かく考へて來ると法苑珠林の著者が阿育王塔式を指して于闐所造に似たりと記したのは如何なる理由に依るのであらうか。余の考ふる所では前に記した燉煌壁畫中の二佛并座の寶塔の如きを指して言つたのではあるまいかと思ふ。前に Lou-tan 發掘の木造塔模型を記したがこの様な寶塔があると共に又かゝる寶篋印塔式の寶塔が地理的にはよほど離れてゐるけれども于闐地方にも行はれたと信じて一向不合理ではない。何となればその原型は既に前出 Bharhut の浮彫塔に見られるし木製方形塔も印度に存在した(註一五)のであるからそれがこの地方に流傳したとも考へられるからである。そして塔としては兩者は異つた形態を有するがこの塔自身の持つ意味に於ては兩者少しも異なる所がなく同じ原型から發達したものである事が知られるからである。

依つて大體次の様な結論を得るのである。即ち印度の Stupa から發達した寶塔が變形して遂に寶篋印塔の如き寶塔を生ずるに至つた。所でその形態の寶塔が何等かの事情に依り阿育王塔として支那に傳へられついで佛身の代表たる寶篋印陀羅尼を容るゝ塔となつて始めて寶篋印塔と名づくべき



塔となり、それが奮然・寂照・成尋・日延(註一六)等の如き入宋僧に依つて日本に傳へられ恐らく平安朝末期以後我國に行はるゝに至つたものであらう。

最後に注意すべきはかの阿育王塔四面に於ける四本生である。これに就いては小野玄妙氏の研究があるからこゝには略するが後世の寶篋印塔四面の種子はこれに代へて五輪塔の種子に倣つて刻するに至つたものである。

(註一)洛陽伽藍記卷五千闥園の條に「死者以火焚燒收骨葬之上起浮圖」と見ゆるから此地方の風俗が知られ或は法顯傳所記の小塔はこの浮圖の様なものではないかと思はれるが又覆鉢形の佛塔のあつた事は同條に「毘盧旃語王曰、如來遣我來令上造覆盆浮圖一軀云云」と見えるから毘盧旃旃(毘盧折那或は毘盧旃又は盧旃)と稱するものがこれを傳へた事を知り得る。この傳説は魏書西域傳にも傳へてゐる。而して Stein 氏發見の木塔模型はかゝる覆鉢形の塔から發達したものである事は後記する。猶國華四五號登載されてゐる足立康氏の「北魏塔婆樣式の系統に就いて」其四參照。(註二) Alexander Cunningham; The Stupa of Bharhut 所載に依る。(註三、四)天沼先生の寫生に依る。(註五)恐らく五箇の相輪を有する前記西域頭となつてやはり二頭が隠れて表はされてゐない例があり又印度 Anavatī 浮彫中に見ゆる塔にもその例がある。又西域記第八摩揭陀國華氏城の條下に玄奘の實見に係る「製奇諸處靈異、間起以表如來五分法身」と見える塔も恐らく五箇の傘蓋を有したものであらうからこの造像例とする事が出来る。猶我長谷寺法華說相版に見える塔も三頭であるがこれも五頭の塔で二頭が隠れたのを原型として誤り造つたものではあるまいか。因に木造建築の寶塔としては法隆寺夢殿、榮山寺八角堂の如きもその例に數へ得らるゝが、これらは相輪の代りに寶珠を載せ又覆鉢形から變化したと認めらるべき形態の部分の部分を有しないから暫く除外して置く。(註六)豐後磨崖石佛の研究八六—八八頁、七一・七三圖。(註七)支那佛教史蹟第五輯九五圖。(註八)同。同一一六圖但し近來俗惡なる修理を施してある。(橋川教授談)。(註九)此れでは前記の如く相輪は三で八角であるが三重樓閣の各層の屋

蓋の二邊には寶篋印塔に見る如き突起物がある。(註一〇)支那佛教史蹟第三輯一四四圖。(註一一) Pelliot; — Touen-hou-ang IV, pl. CCXXIV に散見す。(第一一七窟壁畫)。(註一二)同上、II pl. CXVIII (第七〇窟壁畫)此の塔は燉煌地方に實際行はれた塔であらう。(註一三)同上、IV, pl. CCXXIV 等此等の塔も、(圖は前記した五臺山の圖ではあるが)恐らく燉煌地方に行はれた石塔を描いたものであらう。何となればかゝる小塔迄も五臺山にあるものそのまゝを寫したとは考へられない。恐らく大體のプランは五臺山圖に依り細部は此の地方のものに倣つて描いたものと考へらるゝからである。(註一四)同上前出阿育王瑞現塔のある圖。(註一五)四分律卷五十二參照。(註一六)寂照成尋は日本に歸つてゐないが一緒に行つた多くの入宋僧は大體皆歸つたのであるからそれらを含めていふのである。

## 結 論

以上記した所を要約すると大體次の様に結論し得る。

一 阿育王が造寺造塔に努力した事は摩崖・石柱法勅以下諸書にこれを徴する事が出来るが、阿育王所建之塔は諸書に八萬四千あると傳へてゐる。これは阿育王を理想化して(佛陀の懸記と記すのであるが)鐵輪王と同一視する信仰があつたからで、王は根本八塔を開いて全世界(換言すれば全佛敎文化圈)に八萬四千塔を造立したといふのである。それで後世真正の舍利は育王塔に限るといふ様な信仰も出て來たのである。

(註) この事は本文に記さなかつたが例へば唐道宣の集神州三寶感通錄卷上東晉金陵長干塔緣二日嚴寺の條下に「京寺有塔未安舍利、乃發長干寺塔下取之入京、埋於日嚴塔下、施銘於上、于時江南大德五十餘人咸曰、京師塔下舍利非育王者、育王者乃長干本寺而不測其是非也云云」等と見えるから明らかである。而してこの長干寺塔下舍利といふのは前引高僧傳劉慧達の條に見えた如く慧達の掘起したものである。此等の傳説を比較すると前記の如き劍縣阿育王塔傳説は長干寺舍利傳説から發展したものである事が知られる。

一、その八萬四千塔の一部は支那にもあると信せられやがて、これに倣つて日本にもあるといふ傳説を生じた

一、就中支那剽縣阿育王塔が最も名高く常に支那阿育王塔の筆頭に出されるが、此等阿育王塔を列擧する佛祖統記・法苑珠林等には記してゐないけれども五臺山にも靈瑞を以て聞けた阿育王塔があつた。

一、又吳越王錢弘俶は阿育王造塔の故事に倣つて八萬四千塔を造り寶篋印心咒經を籠めこれを全國名山に埋めて功德を積んだ。

一、我國では平安朝の中頃寂照が入宋したが彼は非常に熱心な文殊信仰者で五臺山へ參詣した。

寂照の五臺山參詣は確實な史料には見當らないが支那に於ける寂照に關する傳説を攷究すると充分參詣説を肯定し得る。

一、而し寂照の五臺山に於ける傳説の中、今昔物語が傳へる貧女化して文殊となるといふ傳説は昔から五臺山に有名な傳説で寂照に關するものではない。

一、この傳説を日本に傳へたのは念救であるが寂照に關せぬ傳説を寂照に結び付けたのは寂照に文殊信仰の熱切なるものがあつた事を物語るものである。

一、所で五臺山に參詣した寂照がその阿育王塔を拜して、我江州石塔寺塔を阿育王塔に擬したとい

ふ様な事が我國に傳へられ、江州石塔阿育王塔寺傳説の起源となつたものらしい。これに關する傳説は今昔物語には傳へられず源平盛衰記以下に傳へる所であるが五臺山東臺に石堂寺があつた事等とも思ひ合はずと何かそこに關係があつたものであらう。

一、石塔寺阿育王塔傳説は後剽縣阿育王塔傳説をそのまゝ依用する事により傳説内容は全く同形式のものとなつた。

一、翻つて西域記所記の印度阿育王塔はその傳説其他に於いて爾餘の塔と殆んど異なる所なく概ね制底塔であるが、前記傳説等に依り阿育王塔にのみ眞正の舍利があると信せられたから後世阿育王塔は舍利信仰の中心となつた。

一、阿育王塔の土中出現傳説は舍利信仰の發達から起つた靈瑞信仰で八萬四千等といふ大數を喜ぶ信仰にもなつたが、此等は何れも泥塔を造る風習信仰等と結び付いたものゝ様である。それで後には埋めて功德を積み又供養をするといふ風習にまで發達した。

一、阿育王塔信仰に共通な燃指供養、遶塔信仰は何れも舍利信仰の形式で我石塔寺阿育王塔にもそれが傳説化して殘つてゐる。

一、我平安末期以後剽縣阿育王塔への我國人の憧憬が高まり當時の識者もその靈瑞に憧憬したがこれはその塔が日支交通の要路たる明州に近かつた爲に外ならない。我石塔寺阿育王塔傳説もその影

響に依つたものである。

一、又同じ頃から前記錢弘俶の金塗塔に倣つた我國にも八萬四千塔を造り舍利の代りに寶篋印陀羅尼を納める事が行はれ或は石造寶塔等を造つてこれを納める事もあつた様である。後者は一種の寶塔であるが寶篋印陀羅尼を納めたから後世寶篋印塔の名を以て呼ばれる。

一、この寶篋印陀羅尼を納めた塔を造るのは主として地獄の苦を免れしむる爲で初め供養の爲造建されたのであるが後、寶篋印塔としては墓碑の代用としても造られた。

一、寶塔は舍利信仰の發達から佛自らがその中にましますといふ信仰を具象化したものでその形態は印度の窣堵波即ち塔から發達したものであるが多少異つた種類がある。而して支那日本の阿育王塔はその土中出現傳説から連想さるゝ如く一種の寶塔であるがその形態は多少異つた傳來を経て構成されたものゝ如く、法苑珠林の著者が剽縣阿育王塔を以て干闥所造に似たりといつたのは干闥地方にもかゝる寶塔が行はれた事を證するものである。而して我國では鎌倉時代から寶篋印塔としてこの形態の塔が造建されたらしいが、當時のものは塔身が一重である。これは西域・支那等からの傳來の形態であるが後世に至つて二重の塔身を有するものとなつたのである。

(補註一) 前號(第九卷二號)拙稿一〇〇頁註二〇に小野玄妙氏の現代佛教所載今昔物語の成立に關する研究(佛敎文學研究の基調と題する)に言及してその論文を未完と記したがあれは不幸落丁の現代佛教を見たからで同誌第四十七號で完結してゐる。

本論文に於ける氏の高見は今昔物語の藍本として三寶感應要略錄を攷證し、その編著年代から今昔物語が源隆國の著でない事

を攷へ、三寶感應要略録は恐らく寛治八年以後我國に傳へられたものとし従つて今昔の編著年代はそれから後とされるものゝ様である。但し今昔の編著年代を積極的に攷證されたものではない。それで大體今の余の所論には影響しないのである。

(補註二) 同じく拙稿八三頁に金石契所載程暹の勝相寺記の「有西竺僧曰轉智云云」の文を引用したがこの西竺僧とは入竺僧の誤りで轉智は我國の僧である。轉智に就いては歴史地理第四十五卷三號所載西岡虎之助氏の「奄蔡の入宋に就いて」七一頁参照。

(補註三) 法苑珠林卷三十八の前記阿育王塔が「似西域千闍所造」文は唐道宣の集神州三寶感應通録卷上にも出てゐる。劍縣阿育王塔の法苑珠林の記事は大體これと同じである。猶西城千闍所造に似てゐるといふ事に就いては前出「北魏塔婆樣式の系統に就いて」なる足立康氏論文(國華四五五號二九七頁)にもその考證が見えてゐるが、それに依ると劍縣阿育王塔の形態が健陀羅系統に屬するものである事が分る。余はこれを詳論する邊を有しなかつたが足立氏は中印度等の塔と比較して健陀羅地方の塔が餘程變化してゐる事を實證せられた。余の所見も大體に於て氏と同じである事を附記して氏の研究に敬意を表して置く餘は後日を期す。

附記 本稿は舍利信仰に關する方面の攷察を出來得る限り省略した。殊に支那以後の阿育王塔に就ては密教に於ける舍利信仰との關係を考慮しなければならぬが、今はその際でないからすべて省略した。而して本稿に於ては事實の確認と傳説の實證或は形態の發展史的觀察等あまり種々の方面に關心した爲、一種纏りの悪い結果を招引した事は遺憾である。

猶本稿中塔の形態に關する考察は天沼俊一博士の指示に負ふ所が頗る多い。もし予の所論にして誤なき點ありとすれば、その點だけは先生の高見である。又杉本文三郎先生の印度の佛教美術中塔に關した部分を参照した點も頗る多い。更に本稿を草するに當り橋川正先生の指示に負ふ所多く且つ御多忙中を煩はして先生の閱覽を辱くした。謹んで諸先生に感謝の意を表する。

(一九二八・三・二六稿・同一・一六訂・同一・二八再訂)